

がん患者の不安 向き合う医師

「がん患者や家族と語り合う」が兵庫県内で広がっている。医師らが臨床の現場を離れ、体の治療ではなく、不安や悩みを中心に耳を傾ける。日本人の 2 人に 1 人は、がんにかかる時代。死を意識した患者らが対話しながら、人生を考える場になっている。

（森 信弘）



患者と笑顔で話す 笹子三津留・兵庫医科大学特任教授＝いずれも神戸市東灘区御影中町 1

「病氣のこと、話してリスト教会。胃がん手術も、哲学外来を始めた 1 いただけですか？」
阪神御影駅（神戸市東灘区）科大（西宮市）特任教授 師の真由子さん（40）と 灘区）近くの御影神愛キの笹子三津留さん（66）

「こころのともしび」を開いた。お金はとらず、1 人と 30～45 分間面談する。笹子さんは現在の国立がん研究センター中央病院（東京）などで勤務し、手術や診察に追われ、患

県内に広がる「哲学外来」

者に十分向き合えないもどかしさを抱えてきた。がんになると、誰でも取り乱す。手術後も再発におびえ、子どものことを考えると不安でたまらなくなる。胸の内を明かし、泣きだしてしまう人もいる。

部屋で診察はせず、カルテもない。笑顔でゆつたりと座り、相手が話しだすと、じつと聞く。両親をがんでなくし、何千人もの患者に接してきた笹子さん。その経験から相手の心に引っ掛かっているトゲに気づくと、ヒントを投げ掛ける。がんは罰が当たったと思う人には「がんは年をとった

ら皆がなる病気でですよ。死におびえる人には「83 歳の父が胃がんになっても、母が父を大切にしている、受け止めて生きていこう」と語り掛ける。がんは、家族の問題もあぶり出す。笹子さんの



気軽に参加できるメディカルカフェ。患者と医療スタッフが立場を超えて会話を

がん哲学外来 順天堂大の樋野興夫教授が 2008 年に提唱。がん患者や家族らの不安や悩みを聞き、個別面談とメディカルカフェの二つがある。一般社団法人がん哲学外来（東京）によると、全国の約 100 カ所で開催され、医療関係者や患者、教会などのボランティアが運営する。がん哲学市民学会はコーディネーター養成講座を開いている。

兵庫県内の「がん哲学外来」

御影がん哲学外来・メディカルカフェ「こころのともしび」
（神戸市東灘区、御影神愛キリスト教会 ☎078・841・0795）

がん哲学カフェ in 播磨
（たつの市、播磨新宮教会 ☎0791・75・2502 / 姫路市、姫路野里教会 ☎079・223・8576）

がん哲学学校 in 神戸
（神戸市東灘区、神戸薬科大学 ☎078・441・7836）

死を意識、人生考える場に

もとを訪れた神戸市灘区「が」の長谷川容子さん（47）は、笹子さんは言う。「が」は、治らないまま長生きする人もいれば、医師は月に数回、個別面談を行うほか、複数人で語る「メディカルカフェ」が週 1 回程度ある。県内では、播磨新宮教会（たつの市）や神戸薬科大学（神戸市東灘区）なども同様のカフェを開設する。

「こころのともしび」で

「こころのともしび」で